

本年度の住宅部門の応募は、個人住宅・共同住宅・店舗併用住宅を併せて合計61件であった。各審査委員の投票及び合議による書類審査のうえ、15件を現地審査対象とした。ただ、1件の辞退があり、最終的には14件を対象に現地審査を行った。その結果、表彰作品として、優秀賞10件（個人住宅7件＜併用住宅2件を含む＞、店舗付き共同住宅3件）、アピール賞2件（個人住宅2件）を選出した。

表彰作品は、書類審査による一次選考、現地視察による二次選考を経て選出された。一次・二次選考ともに、各審査員の投票とその結果をもとにした合議によるものである。特に、二次選考では、視察を通して理解された建物の周辺環境との関係性、および、書類に記された設計主旨と実際の室内空間のスケールやヴォリューム、あるいは、各部屋の関係性や仕上げ材料などの適合性といった観点から議論を行った。また、極めて個性的な作品に関しては、その魅力とともに問題点なども議論した。最終的には、魅力的な作品も多いものの、改善が望まれる部分もあるとして今年度は最優秀賞無しとした。議論の中では、今年度の傾向として、外に対して閉じ、内部に開くという形式が多く見られることが指摘された。そうした傾向を踏まえつつ、住まいのあり方としての内と外の関係性をどう考えているのかを重視して評価することにした。すなわち、外に閉じ、内に開くという閉鎖感の強い作品が多いのは、現代住宅の特徴でもあり、同時に問題点でもあること、また、住まいを中に閉じて家族だけの居心地の良い場をつくることは比較的しやすい、という指摘があった。以上の指摘を受け、地域との関係性を高めていくことができる外に開かれた作品やそうした意識の高いものを評価しようという共通認識が議論の中で確認された。

以下、表彰作品を簡単に紹介したい。

「2cGR」は、建築家の自邸であり、一部に仕事場を持つ平屋の住宅である。作品名の「2cGR」は、2つの中庭（courtyard）と前庭（Garden）と屋上庭園（Roof terrace）を持つことを意味する。緑豊かで開放感があり、間取りもよく考えられた作品である。また、建築の細部も丁寧な仕上げで、建築家のこだわりが感じられる秀作といえる。ただ、屋上庭園は、周囲の住宅から見ると生活を覗かれる心配もあるなど、もう少し周囲を配慮した計画が求められるであろう。

「鎌倉材木座の住宅」は、知人関係にある2家族の住む2つの住宅を1つの敷地に計画したものである。その敷地には、敷地境界線はあるものの、塀を設けずにかつお互いの生活の干渉をできるだけ防ぐよう配置されており、一見すると広い敷地に住宅が不規則に並んでいる欧米の郊外住宅地のようにも見える。住宅の周りは開放的で、庭園計画も優れており、魅力的な環境が評価された。ただ、住宅そのものの計画に魅力的な庭と積極的に係るような提案がほしかった。

「Y House」は、木造2階建ての専用住宅である。構造が独特で、垂直の柱とその周囲の7本の斜材を組み合わせた構造ユニット4セットが主要構造体となって住宅を支えている。まるで、樹木の枝のように斜材が2階の床を突き破って、2階に独特の空間を生み出している点が評価された。ただ、そうした樹木をイメージした独特な構造ユニットの存在が外部には見えない点が惜しまれる。

「天王町 project」は、地上6階建てのRC造による店舗付き共同住宅である。各住戸は、24㎡の小規模住宅が中心だが、間取りは多目的に使える場として玄関土間を広く取り、また、食寝分離を目指すなど計画的工夫がみられ、また、外観も道路側のルーバーの色にアクセントを付けるなどの工夫が評価された。

「余白の杜～茅ヶ崎～」は、木造2階建ての住宅である。デザイン的には小さな箱をランダムに繋

ぎ合わせたような興味深い作品である。箱と箱の間に余白ができ、その余白が風の道ともなっている。造形的魅力が評価されたが、一方で、箱が小さく、全体的に窮屈感と閉鎖感が感じられた点が惜しまれる。

「kamiooka apartment house」は、RC造による3階建ての店舗付き共同住宅である。この住宅は、大きなヴォリュームとなることを避けるために、2つのブロックからなり、その間に大きなヴォイド空間を設けている。その空間は、都心のポケットパークのようでもあり、結果的に建物を周囲に開く姿へと導いている点が評価された。

「ペインターハウス」は、アトリエを併用する木造2階建ての住宅である。その特徴は、徹底したローコストの追求で、しかも単なるローコストだけではなく、空間の質も担保しようとした意欲的作品であり、その点が評価された。敷地が定まらない時点からの計画で、周辺環境との関係性は弱い点が惜しまれる。

「横浜の住宅」は、建築家の自邸であり、北向きの傾斜地に建つ木造2階建ての住宅である。台所や居間は2階に設けられ、窓越しには見事な景観が広がる。1階部分は室内ながらも、外部の延長上のような空間が意識され、使用される材料や建具のスケールなど建築家の自邸ゆえの意欲的なデザインが展開され、その点が評価された。

「王禅寺の住宅」は、木造の2階建て住宅である。中庭を囲むように諸室が配され、中庭に向けて大きな開口部のある、一体感の感じられる空間となっている。また、2階部分と平屋部分の天井は、それぞれ見付け幅とピッチを揃えた現しの根太と梁からなるなど、構造的にも一体感が意識される空間となっている点が評価された。

「BUILDING M」は、地下1階地上3階建ての店舗付き共同住宅で、RC造とS造の混構造である。内部に柱の無い空間を実現するために周囲の7本の柱だけで荷重を支えることにより、間口全体に及ぶ水平の開口部を実現しているなど、興味深い構造と表現が評価された。

「水盤のある住まい」は、外の水盤とともに居間に大きな水盤を設けたユニークな住まいである。隣接する公園との関係から設けたアプローチの位置など改善すべき余地も見られるものの、その大胆さは興味深く、アピール賞に選ばれた。

「growing house」は、アプローチ部分の閉鎖性が気になるものの、内部の周辺環境を取り入れた開放性に魅力があり、アピール賞に選ばれた。